

まえがき

「米軍は休戦協定の建物を当初、直ぐに取り壊せる簡単な建物にしようとしていた。それは事実上の敗北である休戦を無かったことにするためだった」

説明する朝鮮人民軍の大尉は厳しい表情で語った。2018年5月2日、歴史的とも言える南北首脳会談が行われた5日後、私はその会談が行われた板門店で北朝鮮側の説明を受けていた。

朝鮮人民軍の大尉は、1950年から1953年まで戦闘が続いた朝鮮戦争について語る際、米軍に対する敵意を隠さなかった。

「ここで米軍は休戦協定に調印をしたが、彼らは国連軍の旗を置いて『自分たちは国連軍だ』と言い続けた。それは、負けたのは米軍ではなく国連軍だと言うためだった」

まだ30代であろう大尉が当時を知るわけではない。それに、米軍が各国に参加を求めて国連軍としていたのは休戦時よりも前のことだ。しかし、北朝鮮ではそういう説明がなされているのだろう。そして、それは北朝鮮側で代々受け継がれているものなのだろう。

私は、大尉の説明を北朝鮮の政府系機関である朝鮮対外文化交流協会の職員の通訳を通して聴きながら、この本の主人公とも言える人物に思いをはせていた。

第45代米国大統領のドナルド・トランプその人だ。

「トランプは北朝鮮でこうした教えが受け継がれていることを知っているのだろうか？」

恐らく知らないし、知ろうともしないだろう。それがトランプという人物だと思われる。なぜなら彼は世界情勢を考えながら政策を練る合衆国大統領ではなく、身体は大きいものの周囲のことなど考えることもないトランプ王国の王だからだ。

「そういう意味で北朝鮮の指導者とも似ているからお互いに理解し合えるかもしれない…」

私はそう思いつつ、不安の払しょくに努めた。

私は今年2018年4月27日から5月3日まで北朝鮮に滞在し、取材をしていた。私が歴史的とも評される南北首脳会談の直後に北朝鮮に足を踏み入れたのは偶然でしかない。ただ、そうした緊張緩和に向かう流れはある程度、予測はしていた。

例えば、米朝首脳会談が開かれる可能性については、私はかなり早い段階から言及していた。それは何を隠そう、その「王」を見ていてそう感じたからだ。

2017年1月1日に訪米して以降、トランプ政権の誕生から半年間を見続けて帰国した私は、大阪の毎日放送の情報番組「ちちんぷいぷい」のコメンテーターになった。その8月30日の放送で、私は「トランプ大統領と金正恩委員長は似ているという指摘も米国ではあるんです。2人は考え方が似ている。ですから、米朝首脳会談はあり得ると思いますよ」と発言していた。

それは、半年間の中にトランプ大統領の発言や米メディアの分析の他、彼を支持する人々と話をしていたと感じた正直な印象だった。

ただし…と、私は付け加えていた。

「トランプ大統領には確固とした外交政策などありませんから、会談が行われたとしても、

その結果がどうなるかは誰にも分からないでしょう」

それも、また正直な印象だった。

NPOメディア「マザー・ジョーンズ」のワシントン支局長として30年余りにわたって米国の政治取材してきたデビッド・コーンというベテラン・ジャーナリストがいる。コーン氏率いる取材班はトランプ取材し続けた成果が評価されて全米雑誌大賞を受賞しているが、その彼が次の様に話したことがある。

「One thing is sure about Trump is nothing is sure (トランプについてひとつだけ確かなことは、何ひとつ確かじゃないことだ)」

これは他のジャーナリストも度々口にするトランプ評だ。この大統領に確かなことなどない。

外交政策？ そんなこと大統領になる前もなった後も、考えたことないんじゃないか？ こう語るワシントンのジャーナリストはコーン氏だけじゃない。

もうひとつ加えるなら、いささか子供じみた虚栄心ということもあるかもしれない。私個人として、それを感じた時がある。

それは2018年1月に行われた一般教書演説の中継をCNNテレビで観ていた時のことだ。大統領が連邦議会でこの1年の施政方針を示すその場で、トランプ王は政策そっちのけで、功績のあった人々を紹介し続けた。その時だ。

「おや？」

議場で紹介されて手を振っている男性…。それは私の知っているトランプ支持者の姿だった。スティーブ・スタウブ氏。オハイオ州デイトンで小さな機械製造会社を経営する。実は、この本に出てくるオハイオ州のロボット大会の主催者の1人でもある。彼は私と会った時、既にホワイトハウスにも招かれていた。

トランプ大統領の説明は、従業員を増やしたという功績だった。それは事実かもしれないが、スタウブ氏はトランプ支持者だ。要は、自分の支持者を議会に呼んで全米で紹介したということだ。

それにしても、安直に過ぎないだろうか？

「トランプらしい…」

議場で照れながら手を振るスタウブ氏をCNNの画面で観つつ、そう思わざるを得なかった。

この本は第45代大統領を批判するためのものではない。私が見てきた王国の姿をそのまま伝えるものだ。50歳の日本から来たおっさんが王国をブラブラさまよいつつ書いた内容だ。この本を読んで、トランプという人物を、あるいは彼が統治する米国を好きになる人もいるかもしれない。勿論、嫌いになる人もいるだろう。どちらでもそれはそれで構わない。

ひとつ加えておきたい。ここに登場する人はみな実名だ。中には実名を嫌がった人もいるが、お願いして実名とさせていただいた。新聞やテレビに出てくる「アメリカ政府関係者」や「日米関係筋」などという根拠不明な情報源は一人として出てこない。だから彼らが語る内容に嘘偽りのないことは胸をはって言うことができる…。おっと、これ以上書くと、トランプ王のメディア批判に似てくるのでやめておこう。

2018年5月14日

立岩 陽一郎